

# ジリとキリカ

松本 りょう子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジリとキリカ

### 【Zコード】

Z8042L

### 【作者名】

松本 じょう子

### 【あらすじ】

お互いが自転車で通える距離に住む、ジリとキリカの物語。

独特の感性を持つたキリカと、その言動に時に驚き、時に戸惑いながらも一緒にいるジリの、可笑しくて少し切ない日常の風景。

## ジリとキリカ

ジリが山手通りを自転車で飛ばしている頃、キリカは水を張ったバスタブに腰まで浸かってぼんやり天井を見上げていた。

「ジリのヤツ遅いなあ。」

ジリは山手通りを右折して、かむろ坂を登り始めたところだった。

「あつつい！ あつつい！」

八月八日晴れ。ジリのTシャツはすでに汗でびっしょりだつた。坂を登つて二一つ田の角を曲がるとキリカのアパートが見えてくる。喪服姿の集団が前からゾロゾロとやって来るので、ジリは自転車を降りて歩くことにした。近くに斎場があるため、この辺りに来るよく喪服姿の人と擦れ違う。自転車を降りて歩くと更に熱い。

（キリカんちでシャワー浴びよう。）

ジリは自転車を引きながらキリカのアパートまで歩いた。

キリカの部屋は二階の一番奥だ。インター ホンを続けて三回押し たが予想通り返事はなかつた。ジリは仕方なくいつものように合鍵でドアを開けた。

「おーい！ キリカ、いるんだろ。」

けれど返事は無い。ジリは諦めて部屋に上がつたがキリカの姿は無かつた。ふと思いついて、ジリは風呂場を覗いてみることにした。風呂場のドアを開けるとそこにキリカが居た。

「遅かつたじゃないの。一時に来るって言わなかつた？」

ジリは一瞬固まつたがすぐ我に返つてキリカに聞いた。

「お前… 何で服着たまま風呂入つてるの？」

するとキリカは「風呂じやないわよ。水風呂よ。」と平然と言つた。

「水とかお湯とかの問題じゃないだろ…」

ため息混じりにジリがそう言つと、キリカは「何でつて、決まつてるじゃない。あなたのその顔が見たかったからよ。」とあたりまえのよう言つて二コリと笑つた。

「おかげですっかり冷えたわよ。ジリも入る？」

楽しそうにキリカは言つ。ジリも諦め「…そうだな…驚いてすっかり汗も引いたけど、入るか。」とTシャツを脱ぎ始めた。するとキリカが「あー脱いじゃダメよ。そのまま、そのまま。」と言つた。

ジリは驚いて「なんでだよ、オレはいいだろ。」と言つた。

「たまにはいいじゃない、服着たまま入るとなんか自由よ。」ワケの分からぬキリカの言葉にジリは言い返す気力も失せ、仕方なくそのまま水風呂に浸かるのであつた。

「ね、自由でしょ？」

「…ああ、そうかもな…」

## カバとキリカ

その日ジリはキリカの部屋の近所の居酒屋で、キリカと一緒に夕食がてらビールを飲んでいた。

近くに住む常連客が集まる、気取りの無い賑やかな店だ。

「なあ、キリカ一緒に住まないか？」

アルコールの勢いもあって、ジリは唐突にキリカに切り出した。

「なんで？」

そんなジリの質問にもキリカはチューハイを傾けながら、表情も変えずに問い合わせた。

「あたしカバより大きなイビキをかくのよ。」

「・・カバってイビキかくのか？」

「そりゃあ、あんなに大きいんだもの。イビキだつてかくでしょ。」

ジリはそういう問題じゃないと思つたが、キリカはお構い無しに続けた。

「それにね、あたし夜中に原稿用紙一枚分くらいの寝言を言つの。ジリはそれに耐えられるの？」

「ホントに・・？」

するとキリカは笑いながら「あはは。まさか。原稿用紙一枚分寝言を言つてることに気づいてたら、それつてもう寝言じゃないでしょ。」と悪びれもせずに言つた。

つまりはジリは遠まわしに断れたわけだ。

しかしキリカはその後も話し続けた。

「でもね、あたしこの間『カバの肉つて食べられるの！？』って言う自分の寝言で起きたの。」

「・・・へえ。きっと変な夢を見てたんだね。」

「つづん。違うわ。」

妙に確信に満ちた表情でキリカは話し始めた。

「それはね、あたしの前世の記憶なの。」

「何？・・・前世・・・？」

「あたしの前世の前世の前世の前世の前世のあたしがね、石器時代にいるわけよ。」

「・・・・・・。」

ジリはいつものように、また話がおかしな方向へ行つてるとと思いつながら、取り合えず黙つて聞く事にした。

「それでね、あたしが温泉に入つてると・・・」

「ちょ、ちょつと待つて。石器時代に温泉があるわけ？」

「もちろん。マンモスの骨を埋めようとして、地面を掘つてたら温泉が出たの。」

「・・・あ、そう。」

「それでね、あたしが気持ち良く温泉に浸かつてると、ビニカラビもなくドスドスという音が聞こえてくるわけ。」

「・・・・・・。」

「ふと顔を上げると、遠くから一直線に大きなカバが走つてくるのよ。」

「・・カバが？どうして？」

「きっとカバは温泉が大好きで、その匂いを遠くから感じたのね。」

「・・ふーん。」

「それでね、あたしはびっくりしちゃって、ただ近づいてくるカバのことを見ているしかなかったの。でも近くにいたお父さんがね・・・

「お父さん？」

「そう、石器時代のあたしのお父さんがね、『あぶない！』ってそ

ばにあつた大きな石を持ち上げて、あたしに近づいて来てるカバに向かつて投げたの。」

「・・それで？」

「見事その石はカバに命中して、カバはドスンて音を立てて倒れたのね。それで何だかあたしはカバの事が急にかわいそうになっちゃつて、お父さんに『ねえ、このカバどうするの？』って聞いたの。そしたらお父さんが『今日の晩ご飯に今から腹を裂いて焼くんだよ。』って言つたの！ そこであたしはお父さんに『カバの肉つて食べられるの！？』って聞くわけよ！」

満足げなキリカの顔を見ながらジリは何とか「・・・よくそんな妄想が思いつくね・・。」と言つた。

「妄想？ 違うわよ。これは本当にあつたことなの。前世の前世の前世の前世のあたしがね、夢の力を借りて現代のあたしに太古の記憶を思い出させたんだと、あたしは思うわ。」

ジリは一体何の話をしていたんだっけと思いながら、ビールのお代わりを頼んだ。

キリカはしばらく一人何か納得した様子でいたが、突然

「ねえ、あたし砂肝もう一本頼んでもいい？ ジリはいる？」と聞いてきたので、ジリはいらないと答えた。

「それじゃあ、お兄さん！ 砂肝三本下さい！」

「え？ 一本つて言わなかつた？」

「うん。言葉のあやよ。」

アヤ？

ジリは、絶対言葉の使い方間違つてるよなあと思いながら、冷たいビールを流し込んだ。

それから一時間ほどして、ほどよく酔つた二人は居酒屋を出て、

キリカのアパートへと向かっていた。

気がつくと何やら小さな声で、キリカが歌を口ずさんでいたのでジリは「何の歌?」と聞いてみた。

キリカは何で分からぬの?とでも言つよつたキヨトンとした顔で「西島三重子の『池上線』をJAZZ風に歌つてんのよ。」と言つて続きをまた歌い出だした。

ジリにはその歌が、まるでJAZZにも『池上線』にも聴こえなかつたが、キリカがとても楽しそうに歌つていたので、敢えて何も言わないことにした。

それからジリは、『機嫌なキリカを部屋まで送り、キリカのアパートの下にとめてあつた自転車で、自分の家まで帰つた。

部屋に帰つたジリは、冷蔵庫から冷えた麦茶をグラスに入れて飲み、服を着替えて布団に潜り込んだ。

キリカはもう眠つたかな。今日はどんな時代に行つているのだろうとジリは思った。

何にしてもいい時代だといい。

温泉に浸かつたカバのイビキを遠くに聞きながら、間も無くジリも眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8042/>

---

ジリとキリカ

2010年10月8日12時16分発行